



トライアングル
triangle
油彩, 白亜地, キャンバス
oil, meudon and glue on canvas
150,4 × 130,2cm
2013年
吉岡千尋

一幕の絵、小説の建築

Picture in one-act, Architecture in the novel

吉岡千尋 Chihiro YOSHIOKA

夏目漱石の小説「三四郎」では、友人の視線を引き継ぎ、主人公が観察した大学の校舎が描かれている。フェデリコ・フェリーニの映画「そして船は行く」では、部屋を出る前に盲目の皇女に目配せをする参謀、彼の背景には番犬のような犬やこちらに微笑みかける少女の絵が置かれている。

これらの場面は、作品の流れの中にあっては、印象的なものではないかもしれない。しかし、何故か記憶の断片となって、何度も立ち現れてくる不思議な一幕なのである。

このような「イメージとなった」モノの片鱗は、脳裏で確かめる事ができても、不完全なまますぐ

に意識下に戻っていく。この経験を画面に定着させる事が制作の課題である。

近年の制作では、グリッドを用いた即興的な模写によって、イメージを筆跡として残す試みを行っている。そこでは、グリッドによって絵の構造を作るのではなく、構造を垣間見る状態が生まれた。ただし、単純な行為から露わになるものと高機能なツールの組み合わせは、イメージの在処を想起しながら描く事とそれを絵として成立させる事ができるのか、という問いと共に危うさを残し続けている。



一幕の絵
picture in one-act
油彩, 金属粉, 白亜地, 寒冷紗
oil, metal powder, meudon and glue on lawn
21.2 × 29.9cm
2013年



小説の建築 3
architecture in the novel 3
油彩, 白亜地, 寒冷紗
oil, meudon and glue on lawn
29.9 × 21.2cm
2013年